

絵本だいすき！

絵本で共に育ち、生きる (2)

攪上久子

(大学院生)



「ろってちゃん」
ディック・ブルーナ 文・絵
まつおかきょうこ 訳
(福音館書店 2016年)

前回に続きバリアフリー絵本より、今回は障害について (About) 描かれている絵本を何冊か紹介させていただきます。

Dick Bruna のバリアフリー絵本

二〇一七年二月十六日、オランダの絵本作家 Dick Bruna が亡くなりました。「ミッフィーシリーズ」をはじめ、百二十作を超える絵

本を刊行、全世界で五十か国語以上に翻訳され、日本でも約六十冊が訳されているそうです。六年前の東日本大震災のときには、涙を流すうさこちゃんのイラストとメッセージで日本の子どもたちを励ましてくれました。



my best wishes
to Japan
Dick Bruna

福島県の図書館員Sさんは、震災時は避難所となった県内の高校の図書館に赴任中でしたが、その年の四月からは県立図書館の巡回バスの担当になられ、震災直後の県内を走り回られました。そのSさんが、「震災後の新聞で、うさこちゃんが泣いている絵を見たとき、私は泣きたかったのだ、と気づきました。気

攪上久子 (かくあげひさこ)
「世界のバリアフリー絵本展」実行委員長。
お茶の水女子大学大学院 保育・児童学コースに在籍中。

づいたときには泣いていましたが。うまく言えませんが、『うさこちゃんは、私だ』と思いました……』と、ブルーナのこの絵への思いを語ってくれたことがありました。

ブルーナは、あえて言及はしていないのですが、障害がある子や、肌の色の違う子どもを描き、地球にはさまざまな子どもたちがいるということを絵本の中で伝えています。車椅子の女の子の登場する『ろってちゃん』（まつおかきようこ訳 福音館書店）、ベンという四歳の補聴器をつけている子を描いた『ぼくのだいじなあおいふね』（ピーター・ジョーンズ文 なかがわけんぞう訳 偕成社）、他の子と少し違って片方の耳が垂れている転校生のお話『うさこちゃんとたれみみくん』（まつおかきようこ訳 福音館書店）などがあります。ブルーナの絵本は、すべてブルーナカラーといわれる厳選された六色（赤、青、白、緑、

黄、茶）で、さらに縁取りも黒でくつきりと描かれています。登場人物たちは、必ず正面を向き、視線を読者の方に向けています。

このような表現には、もともとバリアフリー性がありますが、ブルーナは、必要な子がいるのなら、積極的に著作のバリアフリー化への変換・翻案を認めてくれた作家さんでもありました。ですので、世界中でブルーナの絵本はさまざまなバリアフリー絵本となっています。本の形そのものがうさこちゃんの形で、絵の黒い輪郭は隆起印刷、絵の一部には触感の違ういろいろな素材が使われ、さらに歌のCDがついた点字つきのさわる絵本や、字を読んだり理解したりすることの難しい子どもたちのために、パワーポイントを使った電子絵本などに変換された本もあります。スウェーデンでは何冊も、さわる絵本になって出版されています。

日本の障害(じしょう) (About) 描かれてい る絵本

日本の About 絵本の特徴は、「障害」の解
説・説明型が多いことでしょうか。障害のあ
る人が主人公で、その障害に焦点が当たって
いるような絵本が多いです。登場人物の中に
紛れて社会の自然な一員として描かれている
ような絵本をなかなか見いだすことができま
せん。

そんな中で、ノンタン絵本に出てくるノン
タンの妹のタータンは、お話ができない（耳
が聞こえない）のですが、その説明のような
ものはありません。言葉を使ってお話をしな
いタータンの姿が描かれ、ノンタンたちが、
そんなタータンへさりげない配慮をして接し
ています。ノンタン絵本が、発売当初、保育
園・幼稚園の先生方や研究者たちから厳しく
批判され、敬遠された絵本だったことはご存

じでしょうか？ しかし、ノンタンシリーズ
は当時から子どもたちに愛され続け、今日ま
でロングセラーになっています。

ノンタン絵本を世に送り出した、当時の偕
成社編集者、故鴻池守さんは、日本のバリア
フリー絵本出版の歴史を築いた方でもありま
す。一九八一年の国際障害者年の前後約二十
五年間、偕成社からはたくさんのバリアフリ
ー絵本が出版されました。鴻池さんは、障害
のある息子さんが地域で共に生きていく世の
中を願って、もう一人同じく障害のある子の
父親である編集者、故中島信道さんと共に、
福祉施策や統合保育・教育が進んでいた北欧
の For や About 絵本を、つぎつぎに日本で出
版しました。国内でも『ボスがきた』『こわい
ことなんかあらへん』など、ストーリーに、
知的障害のある止揚学園（滋賀県東近江市）
の子どもたちに絵を描いてもらった絵本の出
版や、手作り布の絵本やさわる絵本の展示会

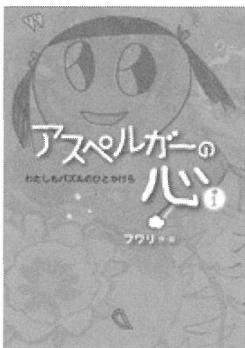
の開催等々を果たしてきました。

また、障害のある子どもたちの存在が「子ども」の中に自然に出てくる絵本として、浜田桂子さんの絵本があります。浜田さんの絵本『ペカンの木のぼったよ』（青木道代文 福音館書店）では、肢体不自由のりんちゃんが登場します。この絵本制作後、りんちゃんが浜田さんの中に住み着いてしまったと言っておられました。浜田さんの最近作『だれのこどももころさせない』（西郷南海子・浜田桂子作 かもがわ出版）にも、たくさんの子どもが描かれています。肌や髪の色もいろいろ、車椅子の子、目の見えない子、発達がゆっくりそうな子など、さまざまなお子どもをその群れの中に見いだすことができます。

当事者によって (BY) 作られた絵本

最後は、止揚学園の絵本のように、当事者が作り手の絵本についてです。About本はほ

とんどが親、教師など当事者を取り巻く関係者によって作られていることが多いのですが、当事者によって (BY) 作られた絵本もたくさんあります。『アスペルガーの心 (1〜3)』（フワリ作・絵 偕成社）は、今は大学生になったフワリさんの、小学生の頃からの学校生活や対人関係の中で感じたこと、自分のことで知ってほしいことなどがご自分の絵と文でかかれています。『でんしゃはうたう』（みねおみつ絵、『おいしいおと』（ふくしまあさえ絵、『かぜフーホッホ』（斉藤俊行絵）（以上、福音館書店）は、四歳で視力を失った三宮麻由子さんが、音で風景を描いています。



▲『アスペルガーの心 1』
フワリ作・絵
（偕成社 2012年）